留学生のキャリア形成を日本語教師はどのように捉えているか
—6 人の日本語教師の相互インタビューから—

松本明香・佐藤正則

要旨
本研究では、日本語学校・短期大学・四年制大学で日本語教育に携わる日本語教師 6 名が相互にライフストーリー・インタビューを行い、それぞれの教師の留学生に対するキャリア観とそのキャリア観が形成された契機について分析した。その結果、留学生に対するキャリア観については、「仕事」「職業」といった狭い意味ではなく、「人生における選択」として捉えていることがわかった。またそのようなキャリア観の形成は、各教師の教育実践や進路指導における学習者との対話、研究活動、教育現場を取り巻く組織との関係性などを含んだ、その教師の「ライフ」が反映され、意味づけられていることが明らかになった。これらより、教師間にキャリア観の差異があることを再確認した。そして、一人一人が持つキャリア観を自覚し、互いの差異を教師間で認識しつつ、差異を乗り越えてキャリア支援を検討する必要があることを論じた。

キーワード
日本語教師、留学生に対するキャリア観、キャリア観の形成、ライフストーリー・インタビュー、「ライフ」

1. はじめに
1.1 研究の背景
近年、言語教育では、言語知識や言語技能の教授にとどまらず、学習者の人格形成やアイデンティティ形成にもかかわり、そのライフ（人生・生活）も支援しようとする動きが見られる。こうした言語教育観において、日本語教師にも学習者と社会を繋げる役割が求められている。そのような視点を踏まえ、日本語学習者である留学生が直面する問題を、彼／彼女らのライフという文脈から捉え直し、改善策を検討するという課題があると考えられる。

その一つとして、留学生のキャリア支援が挙げられる。学習者が社会とつながるプロセスの一つとして留学生のキャリア形成があり、本稿を執筆した 2 名が属する研究グループのメンバーは、そのキャリア形成の支援に日本語教育もかかわる必要性を感じている。

国内の教育機関においては、2000 年以降、外国人留学生の増加と多様化に伴い、彼／彼女らのキャリア支援という課題が浮上してきた。周知の通り、2008 年にはグローバル化社会におけるグローバル人材育成、そして少子高齢化に伴う国内の労働力不足に対応するための労働力確保といった目的をもつ「留学生 30 万人計画」が打ち出された。こうした社会からの要請もあり、大学、短大、専門学校、日本語学校等で留学生のキャリア支援が実施されるようになった。留学生に対するキャリア教育、キャリア支援といえば、ビジネス場面で用いられる言語知識や表現、スキルといった面に焦点を当てたビジネス日本語

の教育（堀井 2008 など）が中心となっている。その一方で、留学生の人格形成の観点からキャリアを捉え、キャリア支援のあり方を検討する必要性も注目されている（寅丸他 2018）。

そのような中で、先述したような留学生のキャリア支援を担う日本語教師自身が、どのように留学生のキャリアを捉えているのか（キャリア観）について問う研究（寅丸他 2019）は多くは見られない。これは、日本語教師自身が留学生のキャリア支援というフィールドでどのような理念を持つのか、留学生のキャリア支援にどのようにかかわるのかという問題は、これまであまり検討されてこなかったことを意味する。筆者たちはこの問題に注目し、また、日本語教師間でも留学生のキャリア形成やキャリア支援の意味づけは微妙に異なり、その差異を明確化する必要があるのではないかという考えに至った。本稿ではこうした視点から、日本語教師の留学生に対するキャリア観について検討することにした。

1.2　本研究の目的

本稿では、日本語教師が、それぞれ留学生に対してどのようなキャリア観を抱いているか、またそのキャリア観をどのように意味づけているのかを考察する。本研究で調査対象となるのは、本稿の執筆者 2 名が属する研究チームのメンバーである 6 名の日本語教師である。この 6 名は四年制大学、短期大学（以下、「短大」）、日本語学校等異なる日本語教育機関で留学生への日本語教育にあたっているが、本研究ではこのような様々な教育現場の日本語教師たちが考える留学生のキャリア形成を明らかにすることを目的とする。こうした様々な教育現場で行われる留学生教育を通して日本語教師に形成されるキャリア観とはいかなるものかを、インタビューを通じて言語化することで、具体像を描くことができるのではないかと考えた。その上で、留学生のキャリア支援のあり方を再確認したい。

2.　研究概要

2.1　ライフストーリー・インタビュー

本研究では、6 名の日本語教師が持つ個々のキャリア観が、人生のどのような経験から構築されてきたのか、そしてそれがキャリア支援とどのように結びついているのかをライフストーリー・インタビューを用いて明らかにする。ライフストーリーは「個人のライフ（人生、生涯、生活、生き方）についての口述の物語」（桜井 2012）であり、「主体の経験の主観的な意味やアイデンティティなどを重視するところ」（桜井 2002）に特徴がある。このような「経験の主観的な意味やアイデンティティ」は「語り手と聞き手によって共同生成されるダイナミックなプロセス」（やまだ 2000）であると言えよう。本研究では、相互インタビューによって共同生成された個々の教師におけるキャリア経験の主観的な意味を記述していく。

2.2　調査概要

本研究では、6 名の日本語教師が相互にライフストーリー・インタビューを実施する方法をとった。一人が 1 回ずつ聞き手と語り手となるように設定した。調査時期は 2018 年夏で、1 回のインタビューはそれぞれが約 60 分程度かけて行った。このように相互イン

タビューという手法をとった理由には、まずメンバー間の公平性を担保すること、そしてラポールが出来上がっているメンバー間でなら、似通っていながらも少しずつ異なる留学生のキャリア観に関するライフストーリーを語り手と聞き手で理解し合いながら、あるいは不明な点を補い合いながら、相互構築していくことができると考えたためである。インタビューは「どうして日本語教師になったのか」「留学生教育とどのように関わってきたのか」という問いを中心に行い、互いの教育上の考えや実際に行なっている教育実践などについて語られた。インタビューは全て IC レコーダーに録音し、文字化した。なお、この 6 名の教師の情報は、表 1 に記す。

表 1　6 名の日本語教師の情報（インタビュー時のもの）

教師	現所属機関	日本語教育歴（どのようなキャリア支援をしてきたか）
A	日本語研修実施機関（海外）	地域日本語教室、日本語語学校で 14 年間（日本語学校で進学指導）
B	短期大学（国内）	日本語学校、大学等で 21 年間（短大で進路相談）
C	短期大学（国内）	日本語学校、大学等で 17 年間（日本語学校、短大の別科で進学指導）
D	四年制大学（海外）	日本語学校、大学等で 20 年間（日本語学校の進路指導）
E	四年制大学（国内）	日本語学校、大学等で 20 年間（大学の留学生向けビジネス日本語科目を担当　）
F	四年制大学（国内）	日本語学校、大学等で 25 年間（大学のゼミ生対象に進路相談）

2.3　分析方法

インタビューデータから、6 人の教師が留学生のキャリア観をいかに捉えるか、また留学生のキャリアの見方をいかに形成してきたかの点でコーディングを行い、その傾向を分析した。

3.　結果

以下では、6 名の教師がそれぞれどのように留学生のキャリア観を捉え、自身の留学生に対するキャリアに対する見方の形成の契機を得たのかという視点で、インタビューの中の語りを見ていく。

3.1　留学生のキャリア観についていかに捉えるか

留学生のキャリア観について、以下のような語りが得られた。

【「やりたいことの発見」として捉える】

A：今の自分が何を考えていて、これを大事にしたいのか、これをやりたいっていうものを、ちゃんと浮き上がらせるっていう作業の方が大事なんじゃないかなっていうふうに思うんです。もちろんそれが将来、自分の方向性につながっていけばもっといいんだと思うんですけれども。

【「意識の切り替え」と考える】

B：学生たちが自分の国に帰るのか、日本でキャリアを重ねていきたいのか、もちろん日本でこれからも日本で働きたいのであれば、そこの意識をチェンジさせないといけないんですよね。（略）やっぱり大学にいる間に、キャリア指導する間に何かスイッチを切り替えるような指導を作り出していかないことには。

【「人生の選択」として捉える】

C：留学生にとって選択ってすごく重要だと思う。ライフストーリー聞いてても、多くの人が選ぶっていう言い方しますよね。そりゃ当然ですよね。日本に来るか来ないか選んでる。そこで、まあ、大学入って帰るか帰らないか選ぶとか、割とほんとに、多くの人が、いろんな人がそういう（略）やっぱり、それなり重要だと思うので、だからやっぱりそこは、そうすると、仕事だけじゃなくて人生の選択みたいなとこが、それが彼らにとってとても大切だから、それが彼らにとってキャリア。なんか、より良い選択することが、その、彼らのキャリア、形成、みたいかな。

【「人生における連続体」として捉える】

D：（日本語学校の留学生に）まあ次どうすんのって言って。将来何したいのぐらいの話はするかもしれないけど、そんなに、なんか、やっぱ責任あるのはその次みたいな、ことはあるわけでだから、専門学校行くか、どうする？とか。それから次で何する？帰国するんだね、そういう話はしても、その次の次のこと。全然考えてない。

B：まさに今私たちがこう、考えてることじゃないですか。

D：そうそうそうそう。

B：キャリアを人生として捉えるっていうこと。

D：うん、そうそう。本当に。

【「生活すること、生きること」として捉える】

C：今どこどこに就職することだけではないといったので、逆に言えば、人間の成長とプラス例えば仕事を選ぶとか、そういうことがやっぱり、お互いに合わさりながら、キャリア観という感じですかね。E さんの。

E：そうですね。もちろん狭義で考えれば仕事とか、そういうふうになるんですけど、それは時と場合によって、広い意味で捉えたり、狭い意味で捉えたりするんだけど、ものすごく根本的に教育とは何ですかとか、いうことを考えたときには、やっぱりそういう広い意味ですよね、生活するとか生きるとか、そういう部分ですよね。

【「人生の歩み」と捉える】

F：（研究の中では）キャリアは、「就職支援」とかじゃなくて、「人生」そのものみたいな考え方をしているじゃないですか。私も、そういう捉え方は好きなんですけど、まあ、要するに、どんな人生を歩むかみたいなことを「キャリア」と言い換えてる。（中略）留学生の場合は、人生全体があって、その中にはもちろん働くこともあるだろうし、勉強することもあるだろうし、家庭をつくるってこともあるだろうし、みたいな。だか

ら、一部分として仕事がある。

以上、6 名の日本語教師が捉える留学生のキャリア観は、それぞれの教師の教育現場やそれを取り巻く教育環境（組織）、また教育実践によって違いが見られた。例えば A、D は日本語学校に勤務していた。そこでの進路先は、企業への就職に限らず大学や短大、専門学校への進学等多岐に渡る。そうしたタイプの異なる進路の中から自分が何をしたいのかを明確化させ、近視眼的に直近の予定を定めるだけではなくその先のステップまで見通した進路選択を行わせる。また B はインタビュー当時、短大を卒業した後のキャリアとして帰国という選択をした留学生も一定数いたことで、上記のような発想になった。帰国か日本でのキャリアを重ねるのかで意識が異なり、日本でのキャリアを選ぶならこの先もずっと続く日本での生活への覚悟が必要ということを示唆している。C、E、F は大学でのキャリア支援に向き合う中での語りだが、E の語りに見られるように、「キャリア」ということばを狭義の「仕事」という意味でだけではなく、広く「生活する」「生きる」といった意味で捉える必要性が現れる。つまり教師たちは「キャリア」の意味と実行される支援のあり方を、目の前の就職だけに向けておらず、人生の中での「選択」「成長」「歩み」として捉えているのである。

この視点で改めて 6 人の教師の語りを見返すと、いずれの教師も単に次のステップを選ぶだけではなく、この先も続く人生を見据えた上でのキャリア選択であり、そこには留学生自身が主体的かつ能動的に歩んで欲しいという期待を持っていることが見えてくる。

3.2　日本語教師は留学生のキャリアの見方をいかに形成したか

次に、教師が留学生のキャリアについて考える契機になったことについての語りを以下に挙げる。

【進学・進路指導や学生との面談といった留学生との対話の場を通して】

A：私、大学院クラスというのを持った時に、初めて進学指導に関わるようになって、初めて学生のキャリアみたいなことに意識をはせるようになったかなぁと思います。大学院に行くためには研究計画書を書かなければならないじゃないですか。その研究計画書はあなたにとってどういう意味があるの？というのをどんどんどんどん問いかけていくんですね。（中略）今その人の内面の中でなぜこれをしたいのか、これが大事なのかということを、問いかけていく、突き詰めていくという作業がすごく大事なんだと感じたんです。

C：いや、印象的な人がいて、日本語学校の 2 年目で、進路指導しながらすごく深く、深くっていうか長く、しかも自分の中で一緒に考える感じになったんです。で、その時の、彼女の進路指導はすごく自分にとって印象に残ってる。あと、もう一人印象に残ってる人がいて、中国の学生さんで、親がこうしなさいって言うんですって、涙ながらに。だけど、君は本当は何がしたいのっていうみたいな言い方したときに、違う答えが出てきたときに、僕はそれでもいいと思うって言う言い方をして、彼女は親にそれをアプローチしていって、自分のやりたい道に、進んだんです。それはすごく印象に残って

いて。

F：(「人生」という意味でキャリアを捉えるようになったのは）教育の一環として考えているから。特に、私の場合、日本語教育として接しているじゃなくて。あの、ほんとにもう教育として、大学生、ゼミ生としてもっと卒論を書かせてみたいな感じでやってるので、その中では人生相談受けたりとかするので。

【教師自身と教育機関との関係性を通して】

B：当初の希望を聞いたうえで、短大の入学を許可したにもかかわらず、やっぱりそういった（自分の理想を実現できずにドロップアウトしてしまう留学生が多いという）結果を招いてしまうのは、キャリア支援が足りない、学校側で、というのが率直なところですね。キャリアといったら、就職というのが出てくると思うけど、今回、四年制大学の三年次編入すら難しいと感じている学生が、もう一回先生、私一年生からやり直したい、という学生もいるんですよ。それってお金も時間もかかってしまうから、すべて編入に持って行ける力をつけさせてあげるのが、本来の私たちの仕事なんだけど、それができてないのが、何かカリキュラムか何かに問題があるのかなと感じている。私だけが考えてても仕方がないんですが、私は日本語を教えるしかできない。特任という立場もある。それ以上学生の進路に首を突っ込む訳にはいかない。そこで何らかのうまくいってない要素があるとしたら、それを見つけてあげないと、次のステップにいけないと思います。

【研究のための元留学生へのインタビューを通して】

D：(元留学生が）大学を修了して、その後どうするかって言ったときに、結構、七転八転してっていうのがわかり、それでどうしたらいいかわからないっていうのに苦しんでるって姿を、インタビューを通して知ってから、ああ、なんかもっともっと、日本語学校にいるときは、日本語の次のことしか考えてないんですけど、だいたい。でもその先のことまで、割と意識して接しないと、その学生は結構大変なんだなっていうことを、インタビューして知ってからですね。そのとき初めて、学生のキャリアっていうのが、自分の中に芽生えたというか、意識するようになった。

【実践と研究の往還の中で】

E：ええと、まず自分は博論書いていて、博論書いたときに、やっぱり教育というのは、こうあるべきなんだというのが自分の中でなんとなく、自分的に理解できた。(中略）それは、自己形成とか自己実現とか支援していくことなんだけれども、それを自分としてはやっぱり、そういうことに関わっていきたい。その延長線上ですよね。だから、博論に関しては、教室でやった授業なので、それはそれで貴重だったなと思うんだけれども、でもやっぱり教室内だけでは、あの解決しない問題というものがあるし、長期的な視点で見るとやっぱり働いたりとか、仕事を持つとか重要になりますよね。そういったところが、やっぱりキャリアに興味を持つきっかけですかね。

C：ということは実践としては、〇大の「考える日本語」とか大きいですかね。

E：大きいと思いますね。関わっているときは、あまり思わなかったけれど、調べているとき、分析しましたよね。当然、博論の対象なので、あの中でいっぱいいろんなことを考えてきて、最後の執筆し終わったときに、自分の課題、これが一生続くとは限りませんけれども、でも自分の今の課題とは何かと考えたときに、やっぱりそういうところに関わっていきたいと思ったんですよね。キャリアだけでなく彼らの人生をサポートするっていうことなんだけど、それが大きかったですよね。

以上、キャリア観形成についての語りを見ると、各教育現場での授業実践や進路指導における留学生との対話、教育現場における矛盾や葛藤、教育実践や自身の研究との関係性を省察することを契機として、それぞれの教師は留学生のキャリアの意味を考えるようになったことがわかる。例えば、A は大学院進学志望の留学生に「この研究計画書はあなたにとってどういう意味があるの?」と問いかけることで、その留学生が「なぜこれをしたいのか、これが大事なのか」と自身に問いかけていく、突き詰めていく状況を作っている。同様に C も「君は本当は何がしたいの」と留学生自身が自問する状況を作っている。このような留学生との対話の場によって、教師自身も「いま・ここ」で取り組んでいることが留学生の人生においてどのような意味を持つのかに気づいている。また C も、「人生相談受けたり」というように、日本語教育よりも広い視野で留学生に向き合っていることが示唆されている。B は、教育機関に留学生のキャリア支援の知見が少ないために留学生の希望が叶えられない状況、また教育機関の制度上 B 自身が留学生の具体的なキャリア支援に関わりにくい状況に直面したことで、自身の留学生のキャリア支援のあり方を見つめ直す契機となっている。D や E は、自身の研究活動とキャリア支援を関係づけている。D は自身が日本語学校で担当した留学生に日本語学校卒業後も追跡調査としてインタビューを行う中で、大学卒業後のことを考えていなかったために進路選択に苦しんでいる様子を目の当たりにし、日本語学習の支援においてもその先のことを考える必要があることを語っている。E は教室活動を取り上げた自身の研究を振り返り、そこから「長期的」に学生のキャリア（「働いたりとか、仕事を持つとか」）も含めて留学生について考える必要性があること、そこから「彼らの人生をサポートする」ことに目を向けていることを語っている。

4. 考察

3 でも述べたように、それぞれの教師は、留学生のキャリアの捉え方を「仕事」「職業」といった狭い意味ではなく、「人生」と考えていることが再確認された。しかしその詳細を見ると、それぞれ切り口は異なる。それは現在あるいは過去の教育実践の現場やそれを取り巻く教育組織、教育環境の違いが反映されていると思われる。その一方で、教師の留学生に対するキャリア観がどのように形成されたかというそれぞれの語りを見ると、その教師が学習者や組織といかに向き合ったかという経験や、教師の教育実践と研究の往還の経験といった、その教師の「ライフ」そのものが意味づけられていることがわかった。こうした多様性が、教師の留学生に対するキャリア観の間で微妙な差異・バリエーションを生んでいるのではないか。そのように生み出されたキャリア観の違いがさらに支援観の違いに繋がっているのではないかと考えられる。

以上のように、日本語教師の留学生に対する多様なキャリア観が明らかになったが、ここで重要なのは、日本語教師はそれぞれ独自のキャリア観を持っており、それを自覚し互いのキャリア観の差異を明確化することにある。本研究で明らかになったように、それぞれの教師の留学生に対するキャリア観は、教育経験や現段階の教育環境、あるいは自身の研究を踏まえた考察が影響して築かれるものである。そして、留学生のキャリア支援という場面で、自分は日本語教師としてどのようなキャリア観を持ち、どのようなキャリア支援の実践に臨むのかを自覚化する必要性が見えてきた。その自身のキャリア観の明確化がなくては、留学生がキャリア支援に期待するものと支援する側との意識の「ずれ」（寅丸他 2018）も認識できず、また留学生のキャリア支援にあたる教師間のキャリア観の差異にも気づかないままとなり、有意義なキャリア支援は望めない。

このような一人一人のキャリア観の明確化には、インタビューという相互行為が役立った。例えば、3.1 の【「人生における連続体」として捉える】の事例では、語り手 D は聞き手である B の「キャリアを人生として捉えるっていうこと」という発話によって、D のキャリア観の言語化に成功している。また次に挙げた【「生活すること、生きること」として捉える】の事例においても、C が語り手の E のキャリア観で重視している点を「人間の成長」と意味づけしたことで、E の「生活するとか生きるとか」という自身のキャリア観を明確化している。異なる教育現場を持ち、異なったライフを送ってきた日本語教師どうしである語り手と聞き手の相互行為によって、語り手のキャリア観の意味が協働的に構築されている様子が見てとれる。

教師自らのキャリア観、そしてそこで自分がいかにあるのか、何をするのかを明確にし、留学生のキャリア支援に関わる者どうしのキャリア観の差異を相互に認識しつつ、またその差異があるからこそ相互行為の中でより鮮明な意味づけが可能となることが明らかになった。

5. まとめと今後の課題

以上、大学・短大・日本語学校に所属する日本語教師の語りから、教師の留学生に対するキャリア観、およびそのキャリア観の形成について議論してきた。その結果、ここで語りを取り上げた教師たちは、「キャリア」を「仕事」や「就職」といった点だけではなく、「人生」といった意味づけをしていることが明らかになった。そしてこうしたキャリア観はそれぞれの教育実践や教育環境、教師自身の「ライフ」に影響されたものであるとの見解を示した。

今回調査対象とした 6 名の日本語教師にインタビューを実施し、それぞれの教育経験や現段階の教育環境、そして研究活動といった一つ一つの経験を踏まえてキャリア観が築かれてきたことがわかった。そしてこの調査経験から、「キャリア」を「人生」と受け止めているとは限らない日本語教師も含め、多様な日本語教師へのインタビューを蓄積していくことで、それぞれの教師が抱く留学生に対するキャリア支援の考え方を浮き上がらせ、なぜそのようなキャリア観を持つのか、なぜそのようなキャリア支援を行おうとするのかを明確化することが必要であるという見解に至った。一人一人が持つキャリア観を明示化し、その自身のキャリア観を主体的に見つめ直すことで、教師が持つキャリア観と留学生たちが教師に望むキャリア支援との「ずれ」が解消されることを期待したい。

（松本明香まつもとはるか・東京立正短期大学・harukam0425@gmail.com）
（佐藤正則さとうまさのり・山野美容芸術短期大学・satomasanori1126@yahoo.co.jp）

参考文献

桜井厚（2002）『インタビューの社会学ーライフストーリー の聞き方』せりか書房

桜井厚（2012）『ライフストーリー論』弘文堂

寅丸真澄・江森悦子・佐藤正則・重信三和子・松本明香・家根橋伸子（2018）「留学生のキャリア意識とキャリア支援の「ずれ」を考える―日本語学校・短大・大学（首都圏・地方）の留学生の語りから―」『言語文化研究』16，240-248.

寅丸真澄・家根橋伸子・松本明香・佐藤正則（2019）「留学生のキャリア支援の実態と課題―日本語教師と学習者の意識の「ずれ」に着目して―」『2019 年度日本語教育学会春季大会予稿集』86-91.

堀井惠子（2008）「留学生の就職支援のためのビジネス日本語に求められるものは何か」『武蔵野大学文学部紀要』9，132-140.

やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味―ライフストーリーの心理学」，やまだようこ（編著）『人生を物語る―生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房，1-38.